

書齋のデスクの上に山のよう積み上がったR.A.D.の宿題のレポートと課題、そしてデアボロの執務の手伝いで行っている業務一通りを終らせるとルシフアーは疲れたように大きくため息をつき執務用椅子にもたれかかった。

一息入るためふと伊吹が淹れた苦みが強いヘルコーヒに飲みたくなりD.D.D.に手を伸ばした。次の瞬間、ルシフアーは手をと苦笑いをしてひたせソロモンと共に人間界に戻っていた。

その瞬間、伊吹が一年間の交換留学生としての期間を終り、情けなく感じた。ルシフアーの胸を痛いほどに締め付けた。

ルシフアーは顔をうずめるとしばらくの間、目を閉じた。一年間はあまりにも濃密だった。

思えば、執務椅子にもたれかかると天井を仰ぎ目を閉じた。一年間はあまりにも濃密だった。兄弟たちは対しては監督役として自分で行った。自覚し、常に一歩引いたところから兄弟たちの様子を見ているルシフアーもそれに釣られるように伊吹と関

入っていた。伊吹が好意は日に増して自分で行った。自覚し、常に一歩引いたところから兄弟たちの様子を見ているルシフアーもそれに釣られるように伊吹と関

目を開けた。ルシフアーの脳裏には伊吹の交換留学生としての最後の夜の記憶が浮かび上がった。それは口数が少なかったが誰よりも傲慢で支配欲の強い7君主の長兄という顔の後ろで伊吹と同じ想いであつたことを喜び、そして迷わず一夜を共に過ごすことを望み

ルシフアーの脳裏にはその夜のことが今もはっきりと焼き付けられていた。使いは慣れた考えれば誰よりも愛おしく、誰よりも一晩を過ごしたいと望んだ男に抱かれる女の悦びに満ちた歓喜の声だった。